

ヘラルボニーと障がい者の自立支援

小金井市立小金井第二中学校 3年 中村 優作

海外出張から帰国した父が、機内でもらったという、とても印象的なデザインのアメニティ・ポーチを母と姉に渡していた。

そのデザインは？と聞いたところ、岩手県盛岡市にある「ヘラルボニー」という会社で知的障がい者が描いたものであった。すごく興味深い話だったので、ホームページを開くと、TOP画面が頭に飛び込んできた。

『「異彩を、放て。」知的障害。その、ひとくくりの言葉の中にも、無数の個性がある。豊かな感性、繊細な手先、大胆な発想、研ぎ澄まされた集中力…

“普通”じゃない、ということ。それは同時に、可能性だと思う。私たち、この世界を隔てる、先入観や常識という名のボーダーを超える。そして、さまざまな「異彩」を、さまざまな形で社会に送り届け、福祉を起点に新たな文化をつくりだしていく。』

この表現にとってもワクワクするような気持ちになりながら、その会社のYouTubeを見ると、「知的障がい者の作家さんとライセンス契約をし、そのアートをモノだったり、コトだったり、場所に展開していくことによって、知的障がいのイメージを変えるスタートアップ。」という事業を展開しつつ、福祉作業所の施設でもあるということだった。

もともとは双子の兄弟が作った会社で、兄が自閉症、その個性を活かすという視点から起業され、いまでは大手航空会社、化粧品会社、クレジットカード会社などとのコラボレーションで、そのデザインを通して社会に異彩を放っている。

このスタートアップ企業を調べていくうちに、さらに感動を受けたことがあった。それは、障がい者はどうしても社会的扶助、すなわち国や自治体から補助を受けるなど、税金に助けられなければならなかった存在だったが、納税する側に回る事ができた。ということをととても嬉しそうに話していたことだ。

大人には納税の義務がある。ただし、どうしてもそれが出来ない社会的弱者の人たちがいて、そもそも税金とはそのような人たちのために使われるものだと思うが、そうした環境に身を置いている障がい者の方々は、決してその環境を良しとせず、自立して社会的責任を果たそうとしている。

私は、このエピソードから、改めて日本の素晴らしく勤勉な一面を見た思いがした。現代社会では、SNSで匿名による誹謗中傷が起きるなど、社会全体が病んでいると思っていたが、まだまだ捨てたものではないと。

これから十年後、二十年後は、私たちが中心となって社会を形成していくことになるが今よりも間違いなく多様性社会が進み、包摂性の高い社会となるような基本的思考を持ちつつ、こうしたスタートアップ企業の取り組みの姿勢を、今後とも大切にしていきたいと思う。